

短期訪日プログラムが学習者に与える意識の変化 —テキストマイニングによる分析—

藤本尊之、前野文康

1. はじめに

海外における日本語学習者は日本にいる学習者に比べ日本人及び日本語との接触が少ない。タイには約5000社の日系企業（Comm Bangkok2012）が進出し、在留邦人も49,983人となっている（日本貿易振興機構 2012）。とはいえ、タイの大学で日本語を学ぶ学生が日常的に日本語に触れる機会は日本で学習する留学生に比べ明らかに少ないと思われる。教科書やメディア等から得られる日本語知識も非常に大切なのは言うまでもないが、その知識の運用練習も日本語能力の向上に必要なのではないだろうか。そしてその日本語運用の機会の一つが留学である。そこで、モンクット王ラカバン工科大学とシーナカリンウィロート大学の日本語学科は東京にある明治大学と協定を結び、毎年10月に約3週間の短期訪日プログラム⁽¹⁾を共同で行い、少しでも多くの学生が訪日体験できる機会を設けている。

ところで、3か月程度の留学は長期と異なる目標が考えられる。熊野他（2009）では短期訪日研修の目標として①これまでに学習してきた日本語を使う。②日本を体験し、理解を深める。③今後の日本語学習に役立つ発見をする。の3つを掲げている。短期留学の成果として松本（2008）は、日本人大学生が韓国への短期留学により、視野が広がり、学習意欲が向上したことを述べている。Nida、前野（2012）では短期訪日中の活動記録及びアンケートを分析し、日本理解が深まったことを明らかにした。このように短期留学で得られるものは視野の広がりである。

このプログラムは日本語学習のみならず、大学での講義やゼミナールの参加を中心に、企業見学、セミナーハウスでの合宿等が行われている。もちろん参加により様々な経験が得られることは感覚的には理解できるが、具体的にどのような変化が見られるかは明確ではない。そこで、訪日プログラムをより充実させ、訪日前後のサポートをするためには学生にどのような変化があったかを正確に捉える必要がある。そこで、プログラム参加前、参加後にインタビューを行い、短期訪日経験により何が得られたか、どのような心的変化が生じたかを考察することとした。

2. 交流プログラム・調査の概要

2.1 交流プログラムの概要

2012年度の訪日期間は2012年10月15日～11月4日までの3週間であった。受け入れ側のキャンパスにおいて日本人大学生に混ざり、講義及びゼミナールへの参加、その他に、東京観光、企業見学を行った。また、受け入れ側セミナーハウスに1泊し、日・タイ文化を発表するなどの

交流等を行う。なお、訪問大学の学生がボランティアでタイ人学生の学習や移動のサポートに当たってくれた。これは前回のプログラムに対する意見で、講義が難しかったという声が上がったため、移動だけでなく、学習サポートもするという受け入れ側の改善があったためである。学習に関しては短期留学生向けの特別な日本語の授業は存在せず、日本語学習より、日本の大学生の生活を経験することや、社会体験が中心のプログラムと言えよう。

2.2 調査の概要

調査は記述式アンケートと半構造化インタビューの2つの方法をとった。記述式アンケートはパーソナルデータを取るためのもので、訪日前1回のみ実施した。また、半構造化インタビューは訪日前1回、帰国後1回の計2回行った。時間は1人10分程度である。インタビューの音声データは宇佐美(2011)の文字化の原則に従い、文字化し、分析対象にした。このような質的データの分析方法としては、グラウンデッド・セオリー・アプローチ等が採用されることが多いが、分析の着眼点の決定やその解釈、概念や理論の生成が分析者の分析技能により左右されること等の困難が伴う。

そこで、本研究ではテキストマイニング(使用ソフトはKH Coder⁽²⁾)を用いることにした。これはテキストデータの中から言葉を自動的に取り出して計量的に分析を行うもので、分析者の予断を極力含めない形でデータの探索や提示ができる。例えばアンケートの自由記述の分析の場合、人間が読むことでおおまかな内容の印象を得ることはできるが、それを客観的な形で第三者に示すことは難しい。しかし、テキストマイニングを行えば、その印象を客観的に伝えることができる(樋口2012)。

2.3 調査協力者の概要

プログラム参加者は8人で、この人数は大学間協定によって決められた人数である。参加希望の人数が集まり次第締め切りを行ったため、特別に選抜試験等は行っていない。2年生から4年生までの学生で、3年生が1番多い。一人を除き高校生の頃から日本語を勉強しているが、3人は今回の訪日が初めてである。以下は参加者全員のプロフィールである。なお、表のアルファベットはSがシーナカリンウィロート大学、Kがモンクット王ラカバン工科大学(KMITL)を示す。

表1 調査協力者のプロフィール

| | 学年 | 学習歴 | 訪日経験 | 性別 |
|----|----|-----|------|----|
| S1 | 4 | 7年 | 無 | 男 |
| S2 | 3 | 6年 | 無 | 女 |
| S3 | 3 | 6年 | 無 | 女 |
| S4 | 2 | 5年 | 1回 | 男 |

| | | | | |
|----|---|----|----|---|
| K1 | 3 | 6年 | 2回 | 男 |
| K2 | 3 | 7年 | 1回 | 女 |
| K3 | 3 | 6年 | 1回 | 女 |
| K4 | 3 | 3年 | 1回 | 女 |

訪日前のインタビューの項目としては熊野他（2009）や松本（2008）を参考に大きく5つの項目を設定し、この項目に基づき質問をした。調査期間は2012年9月19日～26日の間に学生の所属大学にて行った。なお、使用言語は日本語である。

- ①日本語力（日本語運用における自分の弱点はどこか、日本でどんなことを学びたいか等）
- ②日本人との交友関係（日本人の大学生に対してどのようなイメージを持っているか等）
- ③日本社会への理解（日本の街、日本人のイメージはどうか等）
- ④観光としての日本（どんな観光地へ行きたいか等）
- ⑤その他（どうして参加したか。日本へ行くにあたって、何か不安なことがあるか等）

また、訪日後インタビューは以下の5項目を設定した。実施日は2012年11月30日である。

- ①日本語力（行く前と行った後ではどんな変化があったか、今後勉強したいこと等）
- ②日本人との交友関係（友人ができたか、コミュニケーションでどんな問題があったか等）
- ③日本社会への理解（日本人、日本の街についてどう思ったか等）
- ④プログラムに関して（何が一番良かったか、改善点はあるか等）
- ⑤訪日前インタビューに関する質問（行く前にしたかったことは達成できたか等）

3. 調査結果と考察

3.1 抽出語による訪日前後の変化

テキストデータ内の語を名詞、サ変名詞、形容詞の分類で抽出し出現数上位10位までを並べたものが表2である。この表を見れば、どのような語が話題になっていたのかを概観することができる。「日本人」「友達」「勉強」等の語が訪日前後共に、多く発話されていたことがわかる。

本研究の分析で使用したKH Coderは茶釜と呼ばれる形態素解析の結果をほぼそのまま利用しているため、名詞は普通の名詞の他、固有名詞、組織名、人名等細かく分かれていたが、実質語であり出現数の多い名詞、サ変名詞のみ抜き出した。また、形容詞は形容動詞、ナイ形容詞等に分かれていた分類を「形容詞」として1つにまとめた。動詞は「する」や「ある」など、その語を見ただけでは発話者の意図が読み取れなかったことが多かったため、対象から外した。なお、KH Coderは動詞や形容詞などの活用のある語を抽出する際、それらの語の基本形に直して抽出する。したがって、例えば、「難しい」という語が抽出された場合、それが「難しい」なのか「難しく」なのか、抽出語が実際に使われているテキストデータに戻り、見直す必要がある。そこ

で次節より、抽出後が実際に発話された文も提示しながら分析を行っていく。

表2 訪日前 (総語数 6,024)

| 名詞 | 出現数 | サ変名詞 | 出現数 | 形容詞 | 出現数 |
|-----|-----|------|-----|--------|-----|
| 日本人 | 30 | 勉強 | 26 | いい(よい) | 29 |
| 文化 | 19 | 生活 | 13 | 難しい | 19 |
| 友達 | 18 | 一緒 | 9 | 多い | 13 |
| 先生 | 13 | イメージ | 6 | いろいろ | 10 |
| 日本語 | 13 | 会話 | 6 | おもしろい | 10 |
| 大学生 | 12 | 意見 | 5 | 好き | 7 |
| 学生 | 10 | 心配 | 5 | 高い | 5 |
| 文法 | 10 | 経験 | 4 | 大変 | 5 |
| 言葉 | 9 | 試験 | 4 | 楽しい | 5 |
| 自分 | 9 | ダンス | 3 | 厳しい | 5 |
| | | 作文 | 3 | | |
| | | 参加 | 3 | | |

表3 訪日後 (総語数 10,608)

| 名詞 | 出現数 | サ変名詞 | 出現数 | 形容詞 | 出現数 |
|-------|-----|------|-----|--------|-----|
| 日本人 | 57 | 勉強 | 29 | いい(よい) | 53 |
| 友達 | 48 | 授業 | 27 | 難しい | 18 |
| 先生 | 38 | 一緒 | 17 | 好き | 16 |
| 言葉 | 28 | 話 | 13 | 大丈夫 | 14 |
| 日本語 | 17 | 意見 | 9 | はやい | 13 |
| サポーター | 14 | 会話 | 9 | きれい | 11 |
| 自分 | 13 | 経験 | 8 | おもしろい | 11 |
| 電車 | 13 | ダンス | 7 | 大変 | 8 |
| 学生 | 11 | 説明 | 6 | 普通 | 8 |
| 感想 | 11 | 旅行 | 6 | 優しい | 7 |
| 習慣 | 11 | 料理 | 6 | | |

3.2 名詞・サ変名詞 (抽出語)

1番多く抽出された語に変化はなかったが、訪日前、2番目だった「文化 (出現数 19)」に変

化があった。

「明治へ行って、どんな勉強したいですか?」「日本の文化です。」

「日本の文化。多分私は日本に行ったら、えーと、いろいろな文化を勉強できると思います。」

「日本語で何を勉強したいですか?」「うーん、文化。」

といった会話の中で出現しており、来日前には「文化」といった抽象的なとらえ方をしているが、来日後では出現数が減っており、「旅行 (6)」「食事 (5)」「習慣 (11)」といった言葉に変化している。

また、訪日目には8番目に文法 (10)」という言葉も出現している。

「私にとって、会話は文法が正しくないと思います。」

「文法を頑張っています。」

「わたしは、文法、文法が上手じゃない。」

タイで日本語を勉強する際には「文法」に不安を抱えているようだったが、訪日後にはまったく現れず、「話 (13)」、「会話 (9)」、「意見 (9)」、「説明 (6)」、「議論 (3)」などのコミュニケーション能力に関する用語があげられている。

「日本人の友達と議論しました。それでよかったと思います。難しくても頑張りました。

楽しかったです。」

「感想を述べるのは苦手 (中略) でも楽しかったんです。」

「ゼミはいいと思います。意見とか先生」

「日本の、授業は、感想が好きですね。」

「大学生の学び方はおもしろくて、楽しい。(中略) タイの学ぶ方とかなり違います。タイの学生は意見、意見をあまり、言えません。」

日本へ行く前はタイでの授業と同様のものを想像していたのかもしれないが、特にゼミナールに参加することにより、「文法」という学習事項より、自分の考えを述べる授業に学習観の違いを感じ、興味深く感じているようだ。訪日前の2位 (サ変名詞) にあった「生活 (13)」が訪日後、「授業 (27)」に変わっていることから、学習への関心の変化が感じられる。更に訪日後のインタビューで、「特に何をもっと勉強したくなったか」という質問でも

「漢字は、漢字も。駅でとても難しかったから」

「えー今は聴解と漢字」

「話すと聞くことです」

「会話、作文」

といった回答が得られ、文法より会話、そしてタイではあまり触れることのない漢字の必要性も感じたようだ。

また、帰国後は2番目の言葉が「友達 (48)」になっており、更に「サポーター (14)」といっ

た言葉も出現しており、訪日時における明治大学の学生の役割の大きさが伺える。

また、参加者は主に都内2つのキャンパスでプログラムを受けており、ほぼ毎日電車に乗っていることから「電車 (13)」という言葉も多く出現している。タイと異なる交通事情に注目しているようだった。

3.3 形容詞 (抽出語)

訪日前に多く出現した「厳しい」(5)という言葉が訪日後消えていた。

「時間は守らない人もいる」

「私 (朝) 10時に大学へいくと、誰もいない」

など自国での日本人に関するイメージが実際に体験し、変容した学生もいたようである。

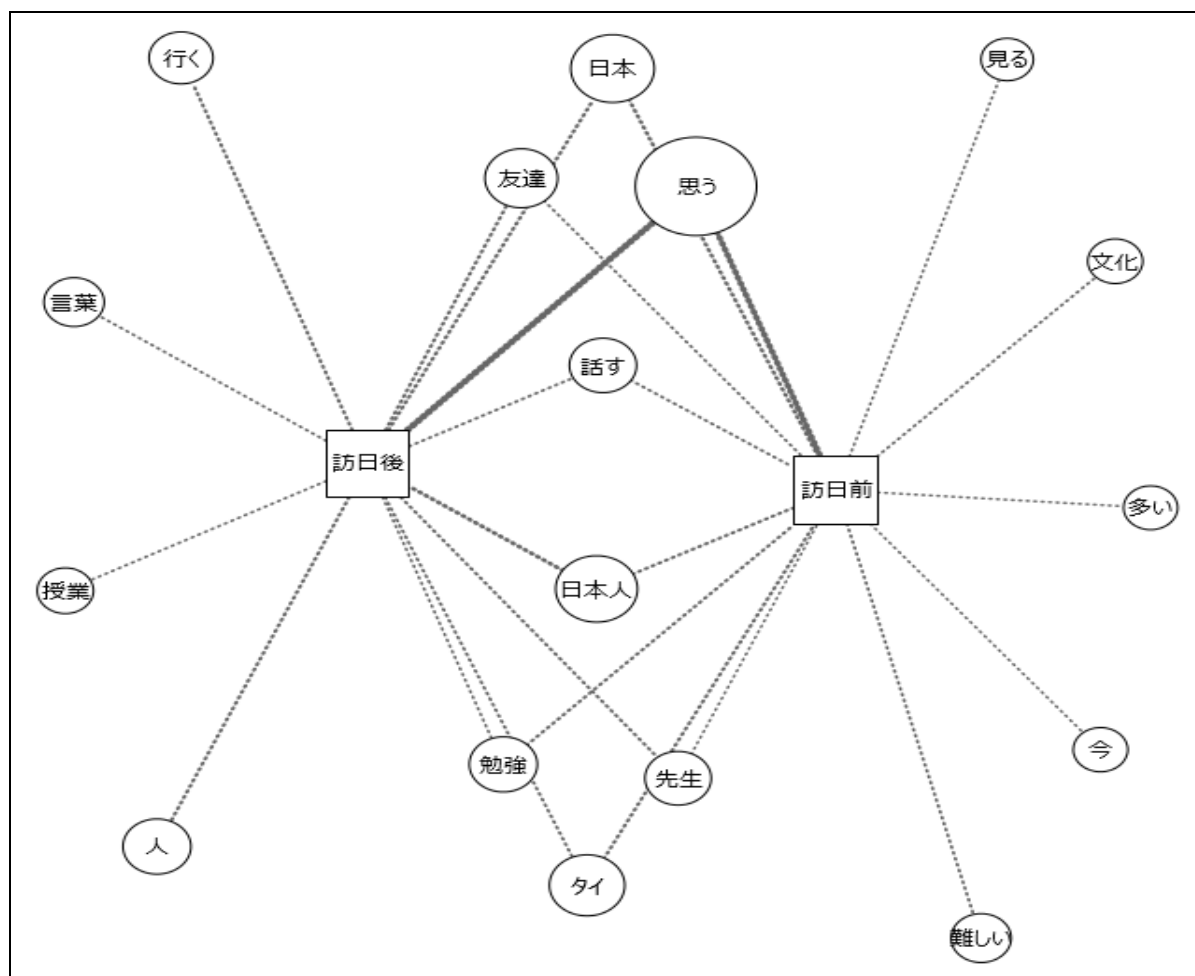
また「きれい」(11)「優しい」(7)といったプラスイメージが訪日後に多く出現しており、訪日プログラムでプラスイメージが多かったことが推測できる。

ここまでは1つの語に焦点を当てて分析した。次に語と語の共起関係から分析を行う。

3.4 訪日前後の共起ネットワーク

次に抽出された語の関連性を見ていくために KH Coder の分析機能の一つである「共起ネットワーク」を使用する。これは出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワークを描くことができるものである。下の図1が被調査者全員分の発話データをもとに、訪日前後の変化を見るために作成した共起ネットワークである。集計単位は文とし、語の取捨選択の基準として最小出現数15、最小文書数は1に設定した。これにより、出現数が15未満の語は分析対象から外すことと、最低でも1文の中にその語が出現していること、つまり文書数で分析対象から外すことはしないことを指示したことになる。話されている内容に注目するため「感動詞」(「ああ」や「えー」など)を除いた。描画に使用した語数は25である。共起関係が強いほど太い線になり、出現数の多い語ほど大きい円になるように設定してある。ただし、位置が近くても、線で結ばれていなければ強い共起関係はない点に注意が必要である。(樋口:61)

図1 訪日前後の共起ネットワーク



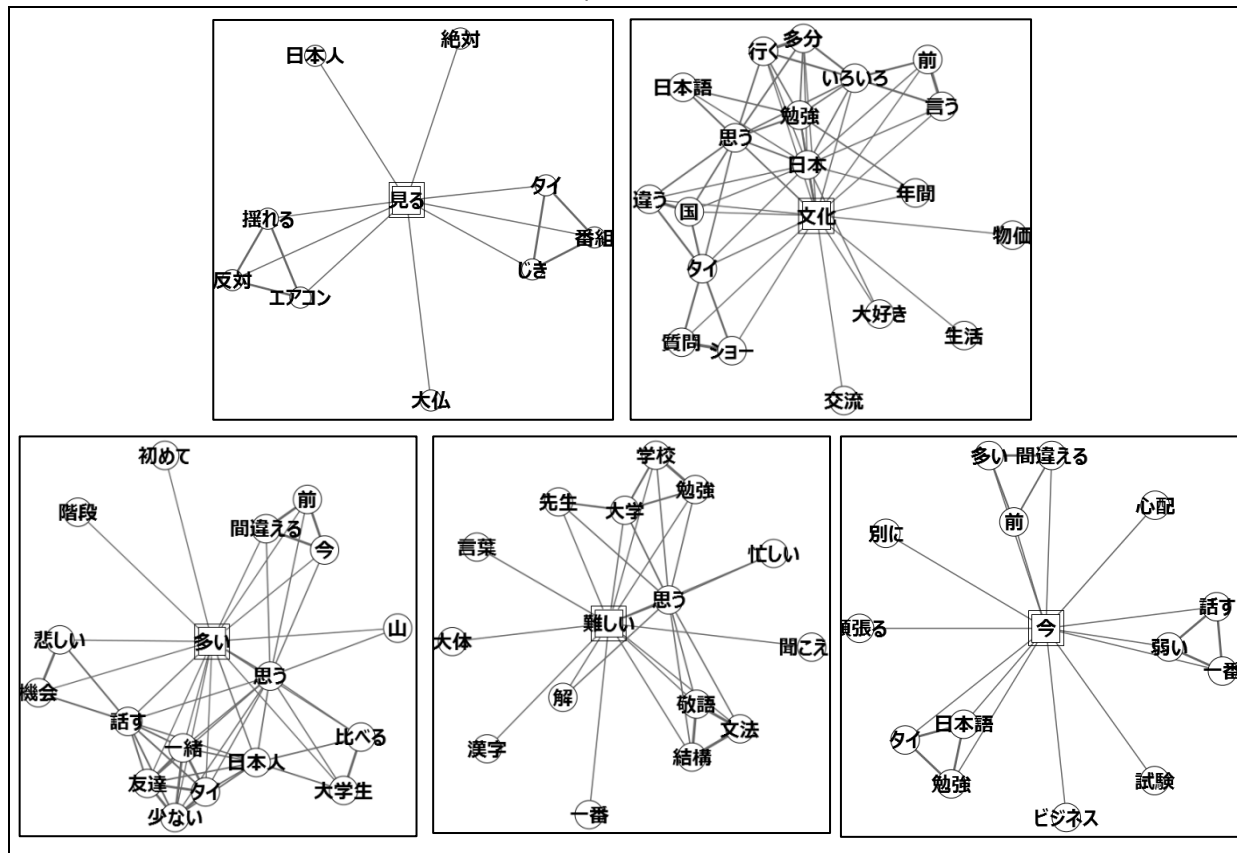
訪日前後の共起ネットワーク（図1）を見ていく。「訪日前」と「訪日後」の間に布置されている語（「日本」「友達」「思う」「話す」「日本人」「勉強」「先生」「タイ」）は、訪日前後のインタビュー両方で頻出している語である。日本や日本人の友達や教師のこと、タイと日本のこと、勉強のことについての意見を述べていることが窺える。一方、「訪日前」の右側にある語（「見る」「文化」「今」「多い」「難しい」）は、「訪日後」のテキストデータ内では出現数が少なく、「訪日前」のテキストデータ内では多く出現していた語であり、特徴語とすることができる。「訪日後」の左側にある語は「訪日後」のテキストデータ内の特徴語である。

次節より、訪日前後で特徴的だった語と関連が強い語のネットワークを描画し、その語が使用された実際の文を見ていく。

3.5 訪日前の特徴表現

図2は訪日前のテキストデータ内の特徴語を中心にした共起ネットワークである。5つの共起ネットワークそれぞれの中央に四角く囲まれている語が特徴語である。5つの特徴語と共起関係の強い語を描画してある。

図2 訪日前の特徴語の共起ネットワーク



「見る」より、日本で大仏を見たいと思っていること、日本の情報はタイのテレビ番組を通して得ていることがわかる。

「文化」より、日本文化が大好きなこと、日本でいろいろな文化に触れてみたいこと、タイと日本の国の文化は違うと思っていること、日本で生活に興味を持っていることが窺える。

「多い」より、日本では日本人の大学生と話す機会が多いだろうと思っていること、今は日本語を間違えることが多いと思っていることが窺える。

「難しい」より、日本語の言葉や漢字、文法、敬語が難しいと思っていること、日本の大学での勉強が難しそうだと思っていることが窺える。

「今」より、今はタイでの日本語学習を頑張っていること、日本語を話すことが苦手だと認識していること、日本に行ってからのことを心配していることが窺える。

3.6 訪日後の特徴表現

図3は訪日後のテキストデータ内の特徴語である。

「行く」より、機会があったら是非もう一度日本へ行きたいと思っていること、日本人の友達と話す言葉を知ることができたことが窺える。

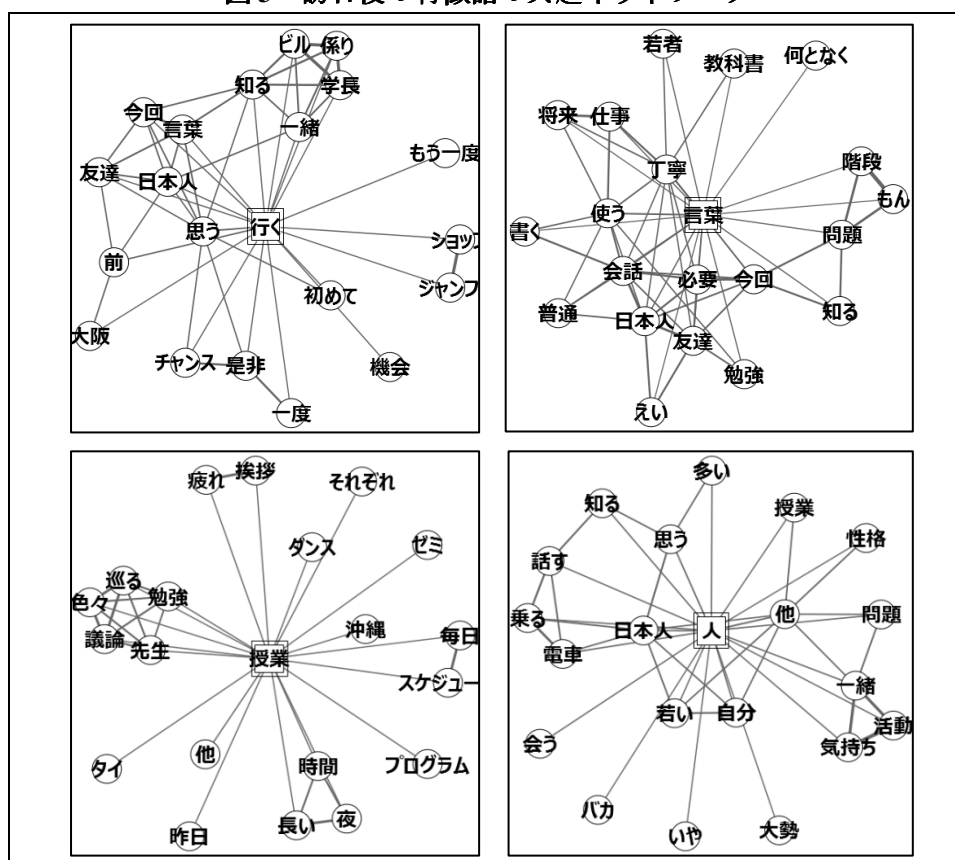
「言葉」より、教科書にある丁寧な言葉と若者言葉を使うことがあったこと、書き言葉と日本人の大学生同士が普通に使う会話の勉強が必要であると思っていることが窺える。

「授業」より、授業でのいろいろなことを議論したこと、授業時間が長く夜までかかったこと、沖縄のダンスやゼミでの授業が印象的だったことが窺える。

「人」より、電車に乗っている人から日本人のことを知ることができたこと、日本人の若者のことを知ることができたことが窺える。

つまり、プログラム参加者達は、プログラムに参加したことにより、より具体的な日本語学習の課題を決めることができるようになり、多くの日本人の知り合いを得て、再び日本へ行きたいと考えていると言える。

図3 訪日後の特徴語の共起ネットワーク



4. 結論

インタビュー結果に対する2通りの分析アプローチにより、訪日前は抽象的な文化ととらえていたものが、訪日後は「旅行」「習慣」といったものにとらえられていること、日本人との交流や授業参加を通して自身の日本語能力の課題が見えてきたこと、日本語学習へのモチベーションの向上など、参加者がこのプログラムで得られたものが明確化できた。そこで、帰国後もモチベーションを維持できるよう日本人との接触を持てるような機会、例えばスカイプを利用した日本人大学生との合同授業などを設ける。これにより参加していない学習者のモチベーションも向上させられるのではないだろうか。あるいは、参加者の体験を報告会のような場で共有することがで

きるだろう。また、事前の研修として、日本滞在中に必要なと思われるコミュニケーションでのくだけた表現と丁寧な表現の使い分けに関するものを実施すれば、参加者の役に立つのではないだろうか。

今回は8人全員をまとめて分析したが、今後個別に分析し、データの精度を高めていきたい。

注

(1) プログラムについての報告は以下のウェブサイトにある。

<<http://www.meiji.ac.jp/infocom/information/2012/6t5h7p00000dykxm.html>>

(2) KH Coder は樋口耕一氏の開発したツールである<<http://khe.sourceforge.net/>>。

参考文献

宇佐美まゆみ (2011) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese:BT SJ)」『談話研究と日本語教育の有機統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』(平成15-18年度科学研究費補助金基盤研究B(2))、pp1-20

熊野七絵・品川直美・羽太園・田中哲也・矢澤理子・西野藍 (2009) 「短期訪日コースのための教材開発—『日本語ドキドキ体験交流活動集』—」『国際交流基金日本語教育紀要』第5号、pp135-149

佐野香織・李在鎬 (2007) 「KH Coder で何ができるか：日本語習得・日本語教育研究利用への示唆」『言語文化と日本語教育』第33号、pp94-95

松本久美子 (2008) 「学生交流と大学の国際化—海外短期語学プログラム「第1回韓国語研修」を一例として—」『長崎大学留学生センター紀要』第16号、pp97-109

日本貿易振興機構「タイ 基礎データ 概況」『JETRO 日本貿易振興機構 (ジェトロ)』
<http://www.jetro.go.jp/world/asia/th/basic_01/>2013年3月1日

樋口耕一「KH Coder 2.x リファレンスマニュアル」『KH Coder』
<<http://khc.sourceforge.net/dl.html>>2013年2月20日

Comm Bangkok Co., Ltd. [編] (2012) 『ハロータイランド：生活・ビジネス情報電話帳』Comm Bangkok

Nida LARPSRISAWAD・前野文康 (2012) 「学習者はどう感じたのか—短期交流プログラムへの参加を通して—」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第9号、pp89-98